琉游舎

アトリエ琉游舎だより 226号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2026年3月11日日発行

春風にこそぐられてや 花の笑み

休甫

●「花の笑み」は花が美しく咲き開くことを表現した言葉です。1年を72の季節に分けた「七十二候」では新暦の3月10日頃を「桃始笑（ももはじめてさく）」と名付けられています。

●春となって花が咲き始める様を「笑う」と表記し「咲く」と読ませる精神は、自然をありのままに観ることで初めて表現できることでしょう。桃の花が咲き始める様子を目の当たりにした春の喜びに溢れています。上記の俳諧は春風に優しく花芽が「こそぐられて」思わず笑ってしまった（咲いた）様子に、おかしみとともに自然への優しい眼差しが見て取れます。

●この句は「花の笑み」の初出例のようです。詠んだ人は津田休甫 。関ヶ原の戦いで滅んだ宇喜多家の武士でした。主家滅亡後、出家して大阪に隠棲しました。豊臣方残党が残る関西で、戦国も敗者の悲哀も感じさせないこの句を詠んだ休甫 は、どんな人物だったのでしょう。あの殺伐とした戦国時代を経験しても、自然をありのままに観ることのできる眼差しを失わない休甫 は、よほどのかぶき者か、はたまた日本人本来の姿なのか、興味をそそられます。

●ここにもカミ（自然）とホトケ（ありのままに観る）の出会いが見て取れます。俳諧と呼ぶにふさわしい、庶民の大らかで優しい心ばえが、俗語や諧謔味によって豊かに表現されています。芸術や文学と呼ぶにはもったいない、ありのままの日本人の精神の発露です。

●俳諧は連歌に始まる形式です。そこには言葉を通した人や自然との共棲が感じられます。一方、明治に子規が確立した、独立した五七五の俳句形式には個の文芸観が強く感じられます。むろん彼の句は自然を詠んだ写生が特徴です。しかし休甫には殊更に私の表現と気負うことなく、戦国から江戸時代へと激動を生きるがままに生きた日本人の智と情が見て取れます。これが現代に受け継がれているかを虚心に観ることが保守・伝統者の勤めなのでしょう。

写経会4/5（日）13時半　読書会 3/17・31（火）13時半

彼岸会･涅槃会法要　3月20日（金）10時半から

狂言綺語…カミ・ホトケ・神・仏（カミとホトケの出会いⅦ）

琉游舎 Ryu Yu Sha Place to pray, play and progress

毎朝、起床後には寝室のある母屋から西隣の琉游舎へ短い外階段を下りて向かいます。出かけている日を除いては欠かさず毎日、朝食前と後、昼、夕方と最低三往復はする短い行き来をもう十年近く続けています。ところが、そんなありふれたルーティーンに思いがけない発見と驚きがあったのです。先日朝食後に琉游舎に向かう階段の半ばで、たまたま顔を前方に向けると、そこには雪をかぶった男体山の姿がありました。今まで前方の林に視界を遮られ、西方は全く臨めないと思い込んでいましたが、男体山の山肌の特徴的な雪の筋が数本、神々しく朝日に輝いていたのです。冬になって葉っぱが全部落ちてしまっていた。朝陽がちょうどよい角度で山肌を照らしていた。たまたま足下ではなく顔を上げていた。など偶然の要素はあったものの、既に一万遍は往復しているに違いない道のりで一度も気づかなかったという事実に、私はそこに在るものを何も観てはいなかったという、ありのままに観ることの難しさを痛感することとなりました。その後、何度もあのときの男体山の姿を見ようと試みていますが、あの時の姿を視界が捉えることができていません。

そこに在るのに、そこに在ることに気づかないままにそこに在るものを、私たちはどれほど多く見過ごしてきたか分りません。同様に、そこに在ったものが常にそこに在り続けると信じ込んでしまい、そこになくなってしまったことに気づかないことも、またどれほど多いことか。実際、何度もあの時と同じ男体山を観ようと試みましたが、再度同じ姿を見せてはくれません。光の差し方や空気の流れ、私の体調や精神が、あのときを再現できていないのかも知れません。ありのままに観たと私が信じたものは、縁起の法則の中で、一瞬の出会いが与えてくれた僥倖なのでしょうか。また、そこに在ったはずのものを再び観たいと願っても再び出会うことが叶わないとしたら、それは幻だったのでしょうか。決してそれは僥倖でも幻でもありません。なぜなら現象は諸行無常、空です。だから僥倖や幻と感じてしまうのです。ありのままの瞬間はカミ（自然）とホトケ（ありのまま）に出会う瞬間です。それは諸行無常の瞬間に出会えた喜びとともに、私の智慧（ホトケ）と精神（カミ）となって私に再帰し続けます。ありのままに生き続けたいと「願い、誓い、行う」ことが、私にあの瞬間へと再帰させ続けてくれるのです。それが信行の道を歩むことなのです。

読経の前にどの宗派も開経偈を読みます。日蓮宗で唱える開経偈の冒頭は「無上甚深微妙の法は百千万劫にも遭い奉ること難し　我今見聞し受持することを得たり　願わくは如来の第一義を解せん」と唱えます。永遠の時をかけてもとても遭いがたい如来の法（教え）に出会えた喜びを表明した言葉です。また法華経の中で唱えられることの多い自我偈では「常住此説法　我常住於此　以諸神通力　　令顛倒衆生　雖近而不見（常に此に住して法を説く　我常に此に住すれども 諸の神通力を以て　顛倒の衆生をして　近しと雖も而も見ざらしむ）」ここでは仏様は常に私たちのもとにあって教えを説いてくれているが、顛倒の衆生（世界をありのままに観ることができず、煩悩によって見てしまう私たちのこと）は、仏様が傍らにいることがわからないのです。と語っています。また日蓮聖人は「**重須殿女房御返事**」の遺文の中で「抑も地獄と佛とはいずれの所に候ぞとたずね候えば（中略）我等が五尺の身の内に候とみえて候。（中略）。佛と申す事も我等の心の内におわします。譬えば石の中に火あり、珠の中に財のあるがごとし。我等凡夫はまつげの近きと虚空の遠きとは見候事なし。我等が心の内に佛はおわしましけるを知り候わざりけるぞ。」地獄も仏も私たちの心の中にいらっしゃると聖人は語っています。例えば石の中に火が（火打ち石）あるように、凡夫が近すぎる自分のまつげも、遠すぎる宇宙の果ても見ることができないと同じように、私たちの心の中にいる仏も知らないままでいるのです。と語っています。私たちは顛倒の衆生、凡夫です。だから仏に出会うことも、カミとホトケの出会いを観ることもとても困難なことです。だからこそ仏に出会えた瞬間は無上の喜びなのです。そのためには常にありのままに観ることを実践して行かなければなりません。ありのままに観る（カミとホトケの出会い）ことは困難であるが、観ることを願い誓い行い続けることが、私たちに唯一できることであり、出会うための唯一の実践の方法であると上記の三つの引用は語っていると私は考えます。

私は数回にわたり「カミとホトケの出会い」について書いてきました。そして今回は「カミとホトケの出会いの瞬間に在る」ことは大変困難である点について考察しました。ここで混乱を招くといけないので、私の言葉の用法について整理いたします。「カミ」と「ホトケ」と「神」と「仏」の記述について、まず「カミ」は日本人の精神の基礎をなす八百万のカミのこと、そしてそれは現在に於いては「ありのままに観た自然」と同義であること。次に「ホトケ」は、最初期に思想として輸入された仏教の基本原理である縁起の法。諸行無常の現象を観る（ありのままに観る）ための智慧と実践方法です。そして「神」は各氏族の氏神、各土地の地主神として祀る対象とされた存在。狭義には明治維新以降、天照大神（天皇）を頂点に序列化された国家神道下における神。最後に「仏」は神仏習合（カミとホトケの出会い）以来、日本人の精神と智慧を担ってきた、日本人であり続けるための基盤となる、日本独自の「信」です。以上のように整理します。

明治新政府の発令した神仏分離令から150年たった今、私たちは何を願い、誓い、行う毎日を過せばよいのでしょうか。私はこの150年を安らぎの日々へ向かう信行が見えなくなっていった日々だったと考えます。神仏習合以来日本人の精神と智慧の基盤であった「仏」は、「神様（神社）」と「宗派仏教」に引き裂かれてしまいました。これが日本人が生き続けるための「智慧」と「精神」の分離をもたらしてしまったのです。願わくば今一度、私たちの智慧と精神を取り戻すことができれば、きっと私はまたありのままの男体山の山容を観ることができるはずです。そうなればそこは私のカミとホトケが出会った場所となることでしょう。